

《楽曲解説》

解説＝岡本 稔

5/17 第864回 オーチャード定期演奏会
5/18 第865回 サントリー定期シリーズ

プッチーニ(1858-1924)

歌劇『トゥーランドット』〈演奏会形式・イタリア語上演・字幕付〉

ジャコモ・プッチーニ(1858-1924)の最後のオペラで、彼は全曲を完成することなく癌のため世を去ってしまった。プッチーニのよき理解者だったアルトゥーロ・トスカニーニの助言にしたがって、作曲者の弟子のフランコ・アルファーノがプッチーニの草稿をもとに全曲を完成し、1926年 4月25日にミラノ・スカラ座で初演された。ただし、この初演では、指揮のトスカニーニは第3幕のリュウの死のところでタクトを置き、聴衆に向かって「ここでプッチーニは仕事を終えました。死は芸術よりも強かったのです」と語って演奏を終えた。翌日の上演では、アルファーノの補筆部分を含む全曲が上演されている。

物語の原作となったのは、ヴェネツィアの劇作家カルロ・ゴッツィ(1720-1806)の1762年に書かれた5幕からなる寓話劇。ゴッツィはコメディア・デラルテの流れを受け継いだ作家で、プロコフィエフの『3つのオレンジへの恋』の原作もこのゴッツィの作品である。プッチーニにオペラ化を提案したのは、台本を担当した劇作家で評論家のレナート・シモーニだったと言われる。プッチーニがこれに興味を示すと、シモーニは同じく劇作家で評論家のジュゼッペ・アダマーミとともに台本を作り上げた。その作業中にも作曲者はしばしば口を出し、その結果、原作にはかなり手が加えられることになった。プッチーニ

は台本の完成した部分から作曲にかかり、全身全霊を傾けて生涯の最高傑作を書く意気込みで創作にあたった。しかし、1924年11月、喉頭癌の手術を受けたブリュッセルで客死し、『トゥーランドット』はついに彼の手で完成をみることはなかった。

『トゥーランドット』はプッチーニのオペラのなかで最大の規模をもち、異国の寓話を扱いながらも、きわめて人間的な主題を見事に処理した作品といえよう。彼の音楽も、単なる異国趣味にとどまらない、きわめて充実したものである。旋律、リズム、和声、楽器法など、すべての面で円熟の極致にあるプッチーニの卓越した手腕が発揮されている。

アルファーノによる補作はリコルディ社より初演前に出版されたが、初演ではトスカニーニによって補筆部分にカットが施された。以来その第2版が広く演奏されている(本公演でも第2版を使用する)。アルファーノによる補作の完全版は、1982年11月、ロンドン・バービカン・ホールにおけるコンサート形式上演まで取り上げられることはなかった。なおイタリアの作曲家ルチアーノ・ベリオは指揮者リッカルド・シャイーの委嘱により独自の補作版を作成、2002年1月にスペイン・カナリア諸島のラス・パルマスでコンサート形式によって演奏され、ザルツブルク音楽祭でも上演されて話題になった。

物語

●第1幕

北京の紫禁城前の広場、城壁の右手角の回廊のアーチに青銅の銅鑼が下がっている。 城壁の上には生首をさらす柱が立ち、後方には門がある。

さまざまな服装の群衆が詰めかけ、役人の読み上げる布告に耳を傾けている。王女トゥーランドットは、その美貌に惚れて各地から求婚してくる王子たちに3つの謎を与え、答えられなかった者たちの首を刎ねているが、布告によると、今日も新たな犠牲者であるペルシャの王子の処刑が月の出とともに執り行われるという。

衛兵が群衆を整理しているうちに、盲目の老人が押し倒され、お付きの若い娘が助け起こそうとした。老人は国を追われてさすらいの旅を続けるタートルの王ティムール。若い娘はタートルの王子つきの奴隷だったリュウで、ティムールに同行して身の回りの世話をしている。娘の叫び声を聞きつけて、ひとりの若者が駆け寄る。この若者こそ身分を隠してティムールとは別にさすらいの旅を続けていたその息子カラフであった。親子が再会を喜びあっていると首斬り役人が登場、続いて哀れなペルシャ王子が処刑場へと進んでいく。

恩赦を求める民衆の声が響く中、バルコニーの上にトゥーランドットが姿を現す。王子カラフは世にも稀なトゥーランドット姫の美しさにすっかり魅せられ、もはや父王やリュウの制止も役に立たず、謎に挑む銅鑼を鳴らしてトゥーランドットに求婚しようとする。そ

こへ宮廷に仕える3人の大臣ピン、パン、ボンが登場。カラフの考えを翻そうと説得を試みるが、彼の決意は固い。やがて首斬り役人が処刑されたペルシャ王子の首を持って現われ、リュウは、「お聞きください、王子さま」を歌って泣きながらカラフに思い止まるように懇願するが、カラフは「泣くな、リュウよ」を歌ってリュウを慰め、「きつと姫の謎を解いてみせる」と自分の動かしがたい気持ちを表明する。そして、リュウに父親の世話を頼んだのち、バルコニー下の銅鑼を高らかに叩き、姫の謎に挑戦する意思表示をする。

●第2幕

第1場 中世のコメディア・デラルテを模したインテルメッツォ ピン、パン、ボンの3人が幕の前に登場、すでに13人もの王子がトゥーランドット姫のかける謎のために命を失っていったことを語り、彼女の頑なで冷たい心を嘆く。つづいて、公務でやむなく北京に住んでいる彼らは、口々に自然の静けさに囲まれた遠い故郷を懐かしむ。

第2場 王宮前の広場。中央には踊り場のついた石の階段がみえる 8人の賢者がトゥーランドット姫の答えの書かれた巻き物を持って登場し、謎解きの準備が整った。役人や博士、衛士たちに囲まれた皇帝アルトゥムは、これ以上血を流すのはしのびない、とカラフに求婚を断念させようとするが、彼の決意は変わらない。

若者に冷たい一瞥を与えたトゥーランドットは、「この御殿の中で」を歌って、昔、祖先の

ローラン姫が、侵入してきたタタールの軍勢のために捕らえられ、辱められたあげく不幸な死を遂げたことを物語る。自分をローラン姫の生まれかわりと信じている彼女はいかなる男性にも心を開かないと誓ったのだ。謎解きだけがトゥーランドット姫に近づく道、けれども結果は常に死であったことを警告する。

いよいよ姫は謎をかける。しかし、カラフは、「希望」、「血潮」、「トゥーランドット」と、つぎつぎに3つの謎を解く。いよいよトゥーランドットは彼のものとなったのだ。皇帝をはじめ人々は大喜び。トゥーランドットはどうかして結婚を避けようとするが、そうした彼女を皇帝アルトゥムは「誓いは神聖なもの」と言って諭す。絶望するトゥーランドット。

こうしたトゥーランドットの様子を見て、心を得られないかぎり彼女を得たことにはならないと考えたカラフは、今度は自分の方から1つの謎を出す。それは、「夜明けまでに私の名を言いあてたら喜んで死のう、しかし、言いあてられなかったときは、私の妻になるのだ」というものであった。姫は首をうなだれて若者の申し出を受ける。

● 第3幕

第1場 起伏に富んだ宮殿の庭。右手の階段を上ったところにトゥーランドットの居間に通じる亭がある 北京の町には、不思議な若者(=カラフ王子)の名前が判るまでは誰も寝てはならない、という布告が出された。王子は名高いアリア「誰も寝てはならぬ」を歌い、暁の光が差し込むとき、姫は自分のものになるだろう、と自信のほどを表明する。

ピン、パン、ポンが現れてカラフの機嫌を

とり、自分たちの命を救うためにも一刻も早く町を出てほしいと懇願、美女や金銀財宝を差し出して彼の名前を探ろうとするが、カラフは目もくれない。そこに突然「名前がわかるぞ」と人々の騒ぐ声が聞こえ、彼の名を知っているティムールとリュウが引立てられてくる。

トゥーランドットは、老人と娘を拷問にかけて若者の名前を言わせようとするが、2人の口は堅い。リュウは「その名は私だけが知っているが、胸の奥深く秘めておくのが私の喜び」といって、鞭打たれながらも決して打ち明けようとはしない。この責め苦に耐える不思議な力の秘密を訝るトゥーランドットにリュウは「氷のような姫君の心もやがてはとけて彼を愛するようになるでしょう」と歌って、それが恋の力によるものであることを説く。そして歌いおわると、突然、傍らにいた衛兵の短刀を奪いとって自分の胸に突き立てる。人々は、この若い娘の清らかな心に同情し、トゥーランドットさえも、かつては知らなかった愛の力に深く心打たれるのだった。

ティムールや町の人々がリュウの死を嘆き、あとにはトゥーランドット姫と王子カラフだけが残る。王子は姫のヴェールを引き裂き、彼女を抱いて情熱的な口づけをする。この初めての甘い口づけによって姫の心も次第に和らいでくる。姫の心を征服したと信じたカラフは、自らタタールの王子であることを名乗り、自分の命を彼女に預けた。

第2場 宮殿前の広場。白い大理石の宮殿の外壁が朝日を受けてばら色に輝いている。広場の両側には、群衆が半円形に並んでいる 皇帝アルトゥムをはじめ、人々の居並ぶ

前でトゥーランドットは王子の名前を告げようとする。息をのんで聞き耳をたてる人々の前で、トゥーランドットは「彼の名は〈愛〉」と厳かに告げる。2人が抱き合うのを見た人々は、おおいに喜ぶとともに、皇帝の徳をたたえる。

[楽器編成] フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、コントラバス・トロンボーン(今回はチンバasso使用)、ティンパニ、トライアングル、小太鼓、大太鼓、シンバル、ゴング、鐘、グロックンシュピール、チェレスタ、タムタム、オルガン、シロフォン、マリンバ、ハープ2、弦楽5部
[バンド] トランペット3、トロンボーン3、アルト・サクソフーン2、ウッドブロック、タムタム

おかもと・みのる(音楽評論) / 1956年、大阪生まれ。東京大学農学部卒(ランドスケープ・アーキテクチャ専攻)。1980年代より執筆活動に入り、主要紙誌に寄稿。共著に「音楽中辞典」、「オペラ事典」(音楽之友社)など多数。ドイツ・後期ロマン派の舞台作品を中心に執筆活動を行い、パイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭などを定期的に取材する。

Column

『トゥーランドット』の日本初演は東京フィル



『トゥーランドット』
日本初演時のプログラム

ブッチーニ『トゥーランドット』の日本初演は1951年。6月28日・29日～7月1日にかけて日比谷公会堂で金子登指揮東京フィルのもと、「東京オペラ協会」の旗揚げ公演として上演されました。指揮者金子登が旗揚げした東京オペラ協会はその後、1952年に『こもり』(1月に仙台市公会堂、9月に日比谷公会堂)、同年10月の文化庁芸術祭オペラ公演での6団体合同による『フィガロの結婚』に参加した後、協会としての名は消えてしまいますが、日本のオペラ上演史に大きな足跡を残しました。

(参考文献: 増井敬二(著)、昭和音楽大学オペラ研究所(編)「日本オペラ史～1952」、水曜社、2003)